

絵本 テキスト創作塾 通信 No.7

話題

手島圭三郎氏

北海道新聞文化賞受賞

第77回北海道新聞文化賞の受賞者が発表されました。手島圭三郎氏の悲願だった受賞が決まり大喜びされました。「増補改訂版手島圭三郎全仕事」の刊行が寄与したと聞いて、ビックリすると共にありがたいことでした。

手島圭三郎氏は2018年10月に文化庁の地域文化功労賞を受賞されており、この表彰は京都で行われ、夫婦で参加されたと聞きました。

一番の違いは賞金が出るか出ないかです。文化庁

の表彰は旅費もホテル代も自己負担、いただいたのは盾のみだったそうです。一方、北海道新聞文化賞は百万円の賞金が出ます。手島圭三郎氏もそうですが、受賞された皆さまにたいそう喜ばれるそうです。

川嶋康男氏は、札幌在住のノンフィクション作家。筆者に手島圭三郎氏を紹介してくれたのも川嶋氏。その川嶋氏から届いメールに受賞の喜びを語る手島氏の明るい笑顔を見て、長年の苦勞が報われた瞬間だと強く思いました。

ご存じのように手島氏の初期作品の15点には、ファンタジーな「転と結」があります。しかし、16点以後からノンフィクション絵本に徹しています。

このことは愛読者ハガキ書かれています。読者が一番よく知っているんですね。

書評

電車になったあおむし

作：菅原真知子

絵：鈴木びんこ

「あおむし」のイメージが、電車とつながるファンタジーなお話。

子どもたちの発想力からすると、陸生節足動物の節が電車の車両になるのも不思議ではなく、素直に受け入れられます。完全変態の「あおむし」は、チョウチョにならずに電車になりました。

お母さんが買ってきたキャベツの葉にくっついていた「あおむし」は、けんちゃんに虫かごに入れてどんどん野菜を与えられて育っていきます。丸々と太った幼虫は突然姿を消します。夢の中で、「あおむし」とけんちゃんはお話をします。翌日「あおむし」は動かなくなり、さなぎになります。その後、普通ならきれいなチョウチョになり、野山を飛んで

いきます。けんちゃんが育てた「あおむし」は額にキズがありました。果たしてチョウチョになれたのでしょうか。

けんちゃんとお母さんは、けんちゃんが夢の中で「あおむし」と話した場所に行ってみます。

「チンチン、ヴォー！」、それも額にキズがある電車。育ててくれたお礼にけんちゃんの大好きな緑色の電車になり、ケンちゃんに会いに来ました。車体をくねらせ、力強く走ってきます。

作家の菅原真知子さんは、広島県生まれ、広島赤十字原爆病院に勤務、退職後に創作活動を開始されています。心のゆとりがない時代において、どのようなことが子どもたちの夢と希望につながるのでしょうか。

デンマークの童話作家ハンス・クリスチャン・アンデルセンが、童話を通じ

て世界中の子どもたちに夢や希望の灯をともしたように、暮らしの中から夢と希望を感じられる作品賞、「第33回アンデルセンのメルヘン大賞」一般部門大賞受賞作品です。

絵は鈴木びんこさんで、日本児童出版美術家連盟会員、フリーのイラストレーターです。色鉛筆画(?)のようなシンプルなタッチと優しい色使い、しかし、絵の構図はダイナミックで、物語をより大胆に力強く、夢と希望を描いています。想像を膨らませる挿絵の創作童話です。

文・芦名丹佐(司書)

作家の言葉

永井 郁子：(絵本作家)

永井郁子さんが初めて作った絵本は、まだ5歳くらいだった甥を主人公にした「たけしくんのクリスマス」。美術大学の課題で

作った作品だったが、たけしくんや友だちがとても喜んで、ぼろぼろになるまで読んでくれたという。

「自分が作ったもので人が喜んでくれる。子どものための絵本を作っていきたいと思いました」、と永井さんは言う。

卒業後は、文学者の大叔父のおかげもあり、すぐさま集英社から『青い鳥』や『ピノキオ』の挿絵を依頼された。しかし、その後は仕事が途絶えたので、アルバイトをしながら絵を書き留めていった。

「絵本を作るには、文章が書けなくてはだめだと思って、コミュニティカレッジの童話創作入門講座に通い始めました」。

それが、講師であった寺村輝夫さんとの出会いだった。ある時、「自分は絵を描いている」と寺村さんに言ったら、「絵を見せなさい」と言われた。どっさり持って行ったら、「この挿

し絵を持ってあかね書房に行きなさい」と言われたという。寺村さんは、元あかね書房の編集者だった。

「言われるままに持って行って見せたら、あとから届いたのが、わかったさんの原稿でした。王さまシリーズでは、細かい絵を描く人を探していたようなのです。こんなラッキーな挿絵作家はいませんですね」。

それがスタートとなり、「わかったさんのおかしシリーズ」10冊、「かいぞくポケット」20冊、「まほうつかいのレオくん」10冊・・・などなど約15年間、寺村さんとのコンビで子どもたちを夢中にし続けた。今なお、書店の児童書コーナーの定番である。

「ページの割り付けも、自分でやりました。ここはぼーんと絵を見せたい、という部分にカラーのページが来るように工夫したり。寺村さんは、ほとんどOKを出してくれました。ほめ

るのが上手なんです。

「べらぼうにいい！ ‘とか言われると、もう天にも昇る気持ちでした」。しかし、『マヤイのおもちゃやさん』が、寺村さんとの最後の仕事になってしまった。「寺村さんが書かなくなってからは、ぼーんと一人ぼっちで放り出された感じでした。400日以上、カットの依頼一つ来ないんです」。

これはまずい、と思った永井さんは、絵も文章も自分で書いた「ドラゴンまるのぼうけん」のシリーズを岩崎書店から4冊出版した。しかし、まったく売れない。

「力の限り書いたのに、このままお蔵入りかと思うと、泣くに泣けません。一人でもいいから読んでほしいと思い、始めたのが読み語りです」。

読み語り・・・と言っても、ただ絵を見せて読むだけではない。本格的なも

のを追求する永井さんは、テーマソングを作り、ダンスを見せようと考えた。

「そのために私は、曲を作り、ミュージシャンのところに通って、編曲を頼み、」歌手に歌を吹き込んでもらいました。そのテープを持ってダンスを習いに行きました。1年かけてタップダンスもどきのダンスができるようになり、読み語りが始まったんです。楽しい読み語りは子どもたちに大人気。

次第にオファーが増えてきたんです。

イルカ：(歌手)

『もものかんづめ』をあらためて読んで強く感じたのは、ももこさんの作品は今の世の女子に大きな影響を与えたな、ということです。こういう先駆者がいて、今の女の子たちが在るんだなって。

最初のページから水虫

の話をする女子なんかいないじゃないですか。当時、一番言いたくなかったり知られたくなかったりすることを逆に言い出したんですよ。すごいことです。ネガティブなことでもバーンと言って、それもいいな、かわいいなって思わせてくれた。

女の子だからおとなしくてかわいくて清楚じゃなきゃいけない、なんていうことに縛られたくない。私も、女子にとっては不利だなと思うことをたくさん体験してきた世代です。そういうものには負けたくないぞ。自分らしさで表現していければと思ってきた。

女の子たちの解放に向けて、ももこさんはすごいお仕事したねって、私も天国に行ったら、そんな話をしたいなと思いました。

2023年11月11日

絵本テキスト創作塾事務局；発行